

学 位 論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨

1. 申請者氏名	山 本 淳 子
2. 審査委員	主 査：連大教授（上越教育大学） 大 場 浩 正 副主査：連大教授（鳴門教育大学） 山 森 直 人 委 員：連大教授（兵庫教育大学） 吉 田 達 弘 委 員：連大教授（鳴門教育大学） 幾 田 伸 司 委 員：連大教授（上越教育大学） 釜 田 聡
3. 論文題目	A Study on the Effects of CALL Environments on the Motivation of Japanese EFL University Students
4. 審査結果の要旨	論文提出による学位申請者 山本純子 から申請のあった学位論文について、兵庫教育大学学位規則第 16 条に基づき、下記のとおり審査を行った。 論文審査日時：令和 5 年 1 月 28 日（土） 14 時 00 分～15 時 00 分 場所：Zoom による遠隔会議 1. 学位論文の構成と概要 (1)論文の構成 第 1 章 序章 問題提起 第 2 章 文献研究 第 3 章 研究方法 第 4 章 ニーズ分析 第 5 章 動機づけに影響を与える心理的要因の特定 第 6 章 CALL が学習意欲に及ぼす影響についての質的調査 第 7 章 CALL が学習意欲に及ぼす影響～英語専攻と非英語専攻との比較 第 8 章 結果・考察 第 9 章 結論 (2)論文の概要 第 1 章では、EFL 学習者の意欲が低下している現状を提示し、その解決に向けた CALL の活用を提案した。CALL を用いた授業は学習意欲を高めるという先行研究がある一方で効果が認められなかった事

例を示し、CALLにおいて対照群を設けることへのハードル、質的研究の必要性について論じた。

第2章では、先行研究に基づき理論的背景が述べられている。CALLの研究において、学習環境の研究が不足していることを指摘した。これを踏まえCALL環境における学習者の意欲がどう変化するのか、それはなぜかという現実を深く見るという目標が示された。COVID-19パンデミックによる緊急遠隔授業（ERT）によって変化した学習環境が学習意欲に及ぼした影響についても分析の対象とした。

第3章の研究方法で、各章の研究のプロセスを明確にした。

第4章では、CALL環境で学ぶ大学生を対象としたニーズ分析をもとにeラーニングについての質問を作成し、既存の動機づけに関する尺度に加えた。

第5章では、CALL関連変数と動機づけ変数の関係を調査し、どのようなCALLの要素が内発的動機づけと自己決定度の高い同一化的調整を予測するのかを調査し次のことを明らかにした。

- ・研究参加者（N=79）においては、同一化的調整（IR）は、内発的動機（IM）とともにすべてのCALL関係の変数と有意な相関があり、IRとIMの重要性が示された。
- ・相関分析では、習熟度が上位群よりも下位群の学生にとって、eラーニングの影響が大きかった。
- ・COVID-19を経験した参加者の調査結果を多変量分散分析にかけたところ、1年生では、動機づけに項目に加えeラーニングがIMやIRの予測因子だった一方、2年生では、L2理想自己がIMやIRの予測因子であった。このことから、ERTは、特に1年生の学習意欲にポジティブな影響を与えていたことが示唆された。

第6章では第5章で得た結果を検証するためにオンライン授業を経験した22人の参加者に対し、CALLについてのインタビューを実施しその結果を分析した。1回目の調査で判明した傾向をさらに明確化すること、ERT直後から一年弱後の対面授業においての変化を捉えることを目指し、一人2回の個別インタビューを行い、1回目と2回目を比較した。主な結果は以下の通りである。

- ・参加学生は、1回目に比べ2回目のインタビュー時にはICTスキルを身につけたためそれが自信や学習意欲につながっていた。
- ・CALLにおけるモバイルラーニング、自動的フィードバック、デジタル教科書などの提示方法によっては、学習意欲が低下する参加者の存在が明らかになった。
- ・大学が指定するeラーニング（単語学習、多読学習）に取り組む際の外発的動機を内発的動機につなげるには、ある程度の強制力によりeラーニングを継続させ習慣化させること、教員からのアドバイス、励まし、適切なフィードバックなどの足場掛けが重要となる可能性を示した。
- ・22人のうち、オンライン国際交流プログラムに参加した6人は概ね交流に対してコミュニケーション意欲と国際的志向性が高い傾向にあった。L2動機づけセルフシステムの観点から、より流暢で積極的なパートナーと交流することで、現在の自己の姿を認識し、理想の自己とのギャップを狭めようとする中で学習意欲を向上させていた。

第7章では「CALL環境は学習意欲を高め、それはCOVID-19中でも同様である」という第5章と第6章の結果が非英語専攻にもあてはまるかどうかを調査するためCALL環境を備えた3つの大学の学生にアンケート調査を行い、英語を専門とする学生の結果と比較した。その結果、専攻、学年、大学の違いが内発的動機に影響しなかったことから、CALLは、環境が整っていればEFL大学生の学習意欲に良い影響をもたらす可能性があることが示唆された。

第8章で研究課題に対する解答を導いた。重要なポイントとして以下のことがあげられる。

- ・CALLの導入・実施において、外発的動機づけ（IR）を目指すことが持続的な学習に結びつく。

- ・CALL環境（対面，オンラインとも）では特に学生間の横のつながりと教員による励ましで学生の不安感の解消と学習意欲の向上につながる。
- ・学生がエンパワーメントを発揮し，情報を発信・共有できるよう促すためにPCを活用したアクティビティを充実させる必要がある。

第9章で全体の研究の要約を行った。本研究の質的研究と量的研究により，CALLが学習意欲に与える正負の影響を明らかにしたことをのべた。また研究の限界点について言及し，最後に今後の研究についての展望を述べた。

2. 審査経過

（1）研究目的の妥当性と論文構成の整合性

本研究の目的は，コンピュータ支援言語学習（CALL：Computer-Assisted Language Learning）環境で学習する日本人EFL大学生の学習意欲の一般的な特徴を明らかにすること，CALL環境下で学習する日本人EFL大学生の学習意欲に影響するCALLの要因を自己決定理論，L2動機づけ自己システム，国際的志向性，L2 WTCといった理論や概念を援用して明らかにすることである。この目標を量的・質的研究を組み合わせて達成を試み，ほぼ成功している。研究参加者や参加大学の数の少なさ，パンデミックにより研究の方向性が変更になったことで反転授業の効果を検証するという目的は十分達成できていないが，ERTを1つの学習環境に含めたことでオンライン授業における学習意欲の分析という面で成果を収めた。研究目的に関連した自身の論文を元に各章を構成し，量的・質的研究で得た結果を導いており研究目的と論文構成に整合性があると言える。

（2）論文の独創性 本論文の独創性

学習者の学習意欲に関連するCALLの学習環境をインタビューから導き，それらが学習意欲にどのような影響を与えているかを量的・質的に調査した点である。パンデミックの影響によるCALL環境の変化に関する調査を行い，緊急遠隔授業（ERT）は学習意欲にプラスの影響を与える可能性があることを示した。質的研究でインタビューを二回行うことでCALL環境における学習意欲の変化と，オンライン国際交流に参加した学習者の持続的な学習意欲を確認している点に独創性がみられる。

（3）論文の学校教育実践への貢献と発展性

技術革新によりEFL学習者を取り巻く環境はデジタル化が進み，タブレットや携帯電話といったモバイルデバイスも教室内外の学習に取り入れられている。本研究はこのような状況の中，どのようなCALLの機能が，CALL環境で学ぶ大学生の意欲に肯定的，否定的影響を及ぼすのかを主要な動機づけ理論・概念を参照して明らかにし，CALLと学習意欲の関係を検証した。これまでのCALLと学習意欲の関係においては，特定の教育的介入が学習意欲に及ぼす影響を調査した研究が主流であったが，本研究では，CALL環境の中で学ぶ大学生の学習意欲に，CALLの特性（真正性，新奇性，ゲーム性，インタラクティブティなど）がどう影響しているのかを調査し，学習意欲に結びつくCALLのあり方を探った。特に質的研究から導かれた各領域における学習意欲のあり方はデジタル化が進む中，学習者の動機づけを支援しようとする現場の教員や研究者の参考となるものである。

3. 審査結果

以上により，本審査委員会は，山本淳子 が提出した学位論文が博士（学校教育学）の学位を授与するにふさわしい内容であると判断し，全員一致で合格と判定した。